

●理想郷実現を目指す

木城町石河内の集落から小丸川を隔てた対岸に、今も「日向新しき村」はある。

町中心部から車で県道石河内―高城・高鍋線を約二十分。山道をたどり、小屋町峠をしばらく下ると、急に山あいが開け、ゆったりと大きく蛇行する小丸川の流れ、そして九州山地を背後に実にのどかな田園風景が展開する。二〇〇二（平成十四）年二月、県道東郷―西都線の開通で山道を通る車も少なくなったが、時代を超えて、ここからの眺めは素晴らしい。

一九一八（大正七）年秋、この峠に立った武者小路実篤は即座に理想郷建設を決心、山道を下り、小舟で小丸川を渡った。開村は同年十一月。実篤三十三歳の時だった。

当初は子どもを含め十八人だったが、多い時には五十人を超えたという。村の会員たちは新しい生活を求め、美術、演劇、音楽、出版など

先進的な文化を山奥に持ち込んだ。だが、現実には厳しく、主食の自給もままならない状態だった。収入のほとんどを実篤の文筆活動に頼った。

その後実篤は二五（同十四）年十二月、村を離れる。三八（昭和十三）年、県営浜口ダムの建設で、村の水田などが水没するのを機に、杉山正雄（昭和五十八年八十歳で死去）、房子（平成元年九十七歳で死去）夫婦だけが残り、活動の中心は実篤が埼玉県入間郡毛呂山町につくった「東の新しき村」に移った。

現在、「日向新しき村」の住人は夫婦二組。七六（昭和五十二）年、「東の新しき村」から移ってきた松田省吾、ヤイ子夫婦と、もう一組で、有機農業を中心に村を守っている。開村八十年を記念、二〇〇一（平成十三）年には実篤が住んだ住居が復元された。しつこい壁造りで、当時の写真などが展示されている。



復元された実篤が住んでいた住居。今も当時の面影が残る

静けさと青空、星の美しさ、そして新しき村に寄せる住民たちの思いは実篤の住んだ当時と変わっていない。その思いは子どもたちにも確実に受け継がれている。

その一つが石河内小児童手づくりの「実篤かるた」。〇一年、三年生以上の十三人が実篤の詩、言葉から四十六を選び、実篤が好んだカボチャ、ピーマンなどの絵をそれぞれが描き、イロハかるたにまとめた。かるたは名刺大とA4判サイズの二種類。全校かるた取り大会を開くなど学習活動に生かしている。

「お互いが人間らしく生きる」。そんな理想郷実現を目指した「日向新しき村」。その精神は今も生きる。

南村正明